

## 紙芝居からラジオへ、ラジオから白黒テレビへ、そしてカラーテレビへ

2023年7月21日

太田隆次

私たちは、戦前、戦時中、戦後とこのかた、家庭や個人差はありますが、自由時間の娯楽として、紙芝居、ラジオ、観劇、映画、テレビなどを楽しんできた世代です。そのうち紙芝居、ラジオ、テレビについて私のささやかな経験を振りかえってみたいと思います。(私は幼稚園に行っていないので幼稚園は省きます)

### 紙芝居

紙芝居を見た人も見たこともない人もいますので説明します。

回想風に書くと、夕暮れ少し前に、紙芝居屋の色黒の初老のメガネをかけたおじさんが古ぼけた自転車に紙芝居道具一式と、飴やするめや煎餅などの駄菓子を積んで5坪くらいの陣取りをした後、拍子木を鳴らすと、子供たちが三々五々どこからか、小銭を握りしめて集まります。集金がもう出来ない15分ぐらい過ぎに後ろでタダ見するチャッカリ者もいました。私はもう5年生でしたから年齢も身長も中ほどでした。

紙芝居は、全国組織でその道のプロ集団が別において、勧善懲悪、怪談、親孝行、冒険、斬り合いなど、勿論カラーでした。セリフは紙芝居のおじさんの名調子の「聞くも涙、語るも涙」などの連発が、いまだに耳に残っています。

紙芝居はそれなりに歴史や情操教育上の効果はあったと思います。

後年、シンガポールで見た映画で、吹き替えの宮本武蔵が「さあー 来い」を「来来！！」(ライライ！！)と叫ぶのがおかしくて、吹き出しそうになったことがあります。

今でも、市役所によっては、貸出用の紙芝居を揃えています。

## ラジオ番組

次はラジオの登場です。

1945年8月15日の終戦の詔は、全国には500万戸も普及していたのに、我が家にはラジオはなく、隣組長のお宅に近辺の住民達が集まって聞きました。そのうち、「少年クラブ」の記事に刺激されて、鉱石ラジオに挑戦、完成後、勇躍して生駒山麓から西の大阪に向かってスイッチを入れたら、ちょうど時刻の変わり目で「JOBK」とNHK大阪局からのコールサインがレシーバで聞こえたときは有頂天になりました。

その後、暫くして電気屋に勤めている近くのお兄ちゃんに、真空管4球のスーパーヘテロダイン（この言葉は不思議にいまだに覚えています）のラジオを、お金を出して作って貰いました。このラジオは後に白黒テレビがくるまで長い間、棚の上に大きく陣取り、故障もせず、文字通り我が家の団欒の主役でした。

ニュース番組や歌謡曲は懐かしのメロディなどのほか、私がよく聴いたのは、連続放送劇（「紅孔雀」など）、クイズ番組（「私は誰でしょう」など）、番組テーマ曲（「宵の明星」「ひるのいこい」など）、野球のナイター放送や語学番組の「カムカム英語」や「流行歌」や「映画音楽」や「名曲番組」などなどでした。

ご参考までにラジオ民間放送も始まった昭和34年2月3日付けの朝日新聞のラジオ番組です。

<http://www7a.biglobe.ne.jp/~scoorap/1959radio.html>

## テレビ番組

次は、本命のテレビ番組です。

NHK が白黒テレビ放送を始めたのは1953年の昭和28年（つまり私たちが高校を卒業した年）で、カラーテレビ放送を始めたのは7年後の1960年（つまり昭和35年）ですから、2023年の現在まで私たちは白黒・カラー合わせて70年間もテレビを見ているわけです。

しかし、ここで考え直さないと思うのです。現在、90歳近い高齢者の私たちが、これから「テレビを見る効用」が、新聞購読をやめたり、購読者が激減するなか、

- ・医療・治療〈費〉問題
- ・健康（維持より改善）
- ・住居と生計の経済問題
- ・社会保障の将来

の維持より改善の情報入手に役立つ高齢者向け番組を「主」とし

- ・娯楽
- ・旅行、観光

・ 美術

・ 文学

・ 歴史

・ 科学

・ 医学

・ 生物

などの情報も大切ですが、「従」であるべきと私は心がけている次第です。

「言われなくても分かっています」といわれることを期待してこの文を終わります。

終わり